



パレスチナ YWCA 支援

ニュースレター Vol.26

2007年12月

発行: 日本 YWCA ビジョン 2015 委員会

〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-8

TEL: 03-3264-0661 FAX: 03-3264-0663

E-mail: office-japan@ywca.or.jp

パレスチナ オリーブ収穫プログラム日記

10月21日～31日に行われた、YWCA/YMCA ジョイント・アドボカシー・イニシアティブ(JAI)とオルタナティブ・ツーリズム・グループ(ATG)共催の「パレスチナ オリーブ収穫プログラム 2007」に、世界各国から36名が参加しました。日本から参加した寺嶋公子さん(日本 YWCA 常任委員・東京 YWCA 会員)の日記をご紹介します。

10月25日(金)

3日間の収穫作業の後、4日目の今日はエルサレム見学の1日だ。宿を出発するバスにはバハの姿がない。私たち参加者全員が全幅の信頼と親しみを寄せている JAI の職員で、プログラムの全てにリーダーとして同行してくれている彼はエルサレムに入れないのだという。ヨルダン川西岸地区に住み、その ID(身分証明書)を持つ人には、エルサレムに入るための特別許可証が必要となる。しかしそれも必ずおけるとは限らない。さまざまな制約や、予告なしの期限切れを宣告されることもあるという。それを聞いて、一同シュンとしてしまった。

三大宗教の聖地であり、人道的・社会的・経済的中心地でもある東エルサレムへのパレスチナ人のアクセスは、第二次インテファダが起きた2000年以降難しくなった。危険防止のための一時的な取り決めは、今や半恒久的となり、総延長721kmとなる分離壁で、東エルサレムをパレスチナ自治区から切り離す目論みがうかがえるという。そう言えば、エルサレムとイスラエルにアクセスできるルート上に壁は作られ、壁のある所ユダヤ人入植地が次々と建設されていた。

聖地の見物の後には、家屋破壊に反対するイスラエル委員会(ICAHD)の一人ヤハブ青年の案内で、エルサレム最大の入植地マラドゥム地区へ。高台から谷をはさんで聖地の寺院やオリブ山が見晴らせる所に、入植地がエルサレムを北・東・南からとり囲むように建っている。約28000人のユダヤ人が住むこの入植地の家賃は安く、更に低所得税という特権までも与えられているという。そして、この地区からパレスチナ人を追い出す手だろうが、自分の土地でいながらいつまで待っても建築許可が下りず、しびれを切らして建てた家はある日突然の通告と共に、家財もろともブルドーザーで破壊されてしまうのだ。移動するバスのなかから、大きな家が瓦礫となって口を開けているのを見た。まるで大きな傷口のように...



©Kimiko TERASHIMA

10月27日(土)

朝8時過ぎに Beit Sufur の宿を出発してアルジャバの畑へ。ここではすぐ近くにバイパスロードが走り、チェックポイントがあるために、農民たちは長時間畑で働く許可がないという。途中の傾斜地はやがて入植地となるのだろうか、緑豊かな

針葉樹やオリーブ樹林が茂っている。注意して見ると、岩山の所々に立派な給水装置が設置されている。こんな岩だらけの高地に、水を汲み上げ引き込む技術と費用は大変なものだろう。どこへ行っても、イスラエル支配下にある土地であることは、舗装された道路と辺りの豊かな緑ですぐ分かる。パレスチナ側に入ったとたん、道路はうねうねと曲がりくねりガードレールもなく、石コロだらけのこぼ道。崖下へ転落しないかとヒヤヒヤする一方、激しい揺れで胃袋が飛び出しそうだ。

土曜日ということで、農民家族が赤ん坊連れの女性や子どもまで来て、短い賑やかな作業の日だった。女性たちはブルカに長いドレス姿で、ゆったりとした表情がなんと美しい。子どもたちは、こ



©Kimiko TERASHIMA

ちらの小さな反応にも目を輝かせ、うれしくてたまらないようだ。「小さい弟や妹の写真は撮ってもいいけれど、私や母や伯母たちはダメなの」と16歳のお姉ちゃんが上手な英語で説明してくれた。この畑の樹は比較的小さいが、紫がかった黒色の大粒な実の手触りは格別！！

オリーブの苗木は2年ほど経つと畑に植えられ、樹によっては3～4年で実をつけ始め、樹齢何百年になるものもあるという。世界からの献金で植えられる苗木も、イスラエル兵や入植者によって引き抜かれることがあるそうだが、繰り返し植え直しているそうだ。実際にその畑を訪れることはなくても、贈った苗木が彼の地で育ち、やがて実をつけて、パレスチナの人々の手に摘まれる日を祈りつつ待ちたいと思った。「オリーブの木キャンペーン」が、パレスチナの人々に希望を贈るのだとすれば、それは贈る私たちにも夢を与えてくれるものだ。

10月28日(日)

今日は朝からヘブロンへ向かう。旧市街では、野菜・果物・肉・生きた鶏・菓子・雑貨・衣類など生活感溢れる市場の細い通路に行く。活気のあるこういう場所は本当に魅力的だ。しかしそこにも銃を持ったイスラエル兵が辺りを威嚇するようにたむろっていて、不安と嫌悪が刺のように胸を刺す。

ここでも入植者は増え続け、町はイスラエル側・パレスチナ側に分断され、至る所で道が大きなブロックやフェンスで塞がれていた。分離壁などにはここにはないが、Silent Wall(無言の壁)と呼ばれる障壁は至る所にあるという。市場の最終地点には、金属探知機つきのゲートが待ちうけ、私たちも列を作って順番を待つ。ようようそこを通過すると、今度は手荷物や身分証検査のチェックポイントがあり、兵士にパスポートの提示が求められた。やっと到着したイブラヒム・モスクは、旧約聖書に登場するアブラハム・サラ・イサク・レベカなどの墓所。内部はユダヤ教側とイスラム教側に分けられていた。1994年、ユダヤ人入植者がこの寺院に突入して、礼拝中のパレスチナ人29人を射殺した事件がこの町の名を世界に知らしめた。

帰路、ディヘイシャ難民キャンプへ。1948年イスラエル建国によって、近隣52の村から人々は追われ、ここに集められた。現在の建物はパレスチナ住民の力で建てたものだが、狭い土地にひしめき合うように並んでいる。約12万人が暮らすこの地区には学校が2つ、診療所はたった1カ所で、医師1人、看護師2人とのことだった。通りがかった小さ



©Kimiko TERASHIMA

な診療所の看板に、「日本政府寄贈」と英語で書かれていた所があったが、果してそこがそれ・・・？ここでも反抗的な態度の住人の家ということで、つい先日破壊されたという家屋が無残な姿を晒して

いた。しかし、失業率 75%という現状のなかでも、キャンプ内の若者や女性のためのプログラムが実施されていた。「難民キャンプに住み続けることそのものが、彼らの抵抗運動なのです。いつの日か、自分の土地に戻るとの希望を掲げて」と案内の男性は語ってくれた。

パレスチナはどこへ向かうのか

JAIマガジン Vol.2, 2007

国家がその歴史上で混乱期を経験する際には、欺瞞行為が急増し、「なにが隠蔽されたのか」に対して「何が明らかなのか」、さらには、なにが形式上のことでなにが実行可能なのかという問題のはざまで混乱が起きる。パレスチナには、その国家計画を揺るがす脅威となるさまざまな外部・内部の勢力の中核が存在している。パレスチナ人のアイデンティティはこれらの勢力に脅かされており、緊急に対応しなければ、国家計画の崩壊を招き、パレスチナ社会に離反と無秩序をもたらすことになるだろう。

この数年で、パレスチナの人々は激しい内部変化を数多く経験した。政治的・社会経済的、そして法律的变化で、パレスチナの社会制度・価値観・文化的認識を損なってしまうほど大きいものもあった。政治的に不安定な状況下でのこのような急激な変化は、自らに強いられる新たな試練に適応できないでいる人々にとって無益である。

さらに、現地のパレスチナ人の利害は地域勢力や国際勢力とそれぞれ独自に絡み合っている。これらの勢力に対応するには、パレスチナの能力を超えた、より総合的な関与が必要である。国際協力は、パレスチナの言い分を支持する以上の役割を望まれてはいない。国際的な支援は、パレスチナの人々を制約し続けるこの紛争に終止符を打つことこそ役割を果たすべきなのである。

今日、パレスチナの政治的な状況は、民族/宗教的な対立・環境問題・過激主義・軍国主義・民主化そして「テロとの闘い」といった、地球上に存在するあらゆる国際的な衝突の縮図となっている。イスラエル - パレスチナ間の紛争における西側諸国と

各階層にわたってのその存在は、国際法や地域の歴史的関係を意図的に標榜する(あるいは無視する)一方で、イスラエル・パレスチナ双方の地政学的な問題の解決を企図している。このようなダブル・スタンダードは、パレスチナ人のアイデンティティを脅かし続ける、すでに複雑化した紛争を一層深刻化させるだけである。

和解活動が成果をあげるためには、パレスチナ社会から置き去りにされた領域の問題にも目を向けた、広範でかつ信頼できる情報源をもとに、「事実」が考慮されなければならない。

私たちは、国際社会において仲間の参加を得て、この闘いに加わってもらうことによって、私たちが共に、占領下で生活する上での障害を克服し、パレスチナの人々に平和な未来を築くことができるものと確信している。

JAIチーム

(翻訳協力:後藤幸男)

STOP THE WALL キャンペーン

ファトヒ・クデイルートさん
スピーキングツアー in 名古屋

11月24日、「パレスチナの平和を考える会」が招聘したファトヒさんの講演を、名古屋 YWCA でも全国スピーキングツアーの一環として行なった。



©NAGOYA YWCA

内容は主にヨルダン渓谷の現状について。多くの写真と映像を活用し、わずか数百メートルしか離れていない入植地と、パレスチナ人の村の子どもたちの格差、ヨルダン渓谷では児童労働が深刻な

問題のひとつであることなどを伝えられた。

全体の中でも特に印象深かったのは、家をイスラエル軍によって破壊された少女の映像だった。家がなく、家を建てる自由もない、困難な中、ようやく建てた家がたった1カ月でイスラエル軍の爆撃によって破壊されたという現実。その家が彼女や家族にとってどれほど大切だったか、美しいものだったか。涙を流しながら語る少女の姿から、背景にあるパレスチナの現状が切々と伝わってきた。

ファトヒさんはとても穏やかで忍耐強さを感じる人柄だった。それはもう少し考えてみれば、パレスチナの厳しい現状の中で培われた優しさからかもしれない。

この講演の中で「この状況を知りながら何もしないことは、占領を黙認するのと同じことです」と言った彼の言葉を大切にしたいと思う。

現場の声を聴く、現場の声を届けることが、今私たちがここでできることなのかもしれない。

名古屋の講演会では、今回の講演が参加者にとって、パレスチナからのメッセージにみみをすます機会となってほしいと願って、講演前に、谷川俊太郎さんの『みみをすます』を朗読した。

その一部を以下抜粋し、お届けします。

ひとつのおとに

ひとつのこえに

みみをすますことが

もうひとつのおとに

もうひとつのこえに

みみをふさぐことに

ならないように

みみをすます

(名古屋 YWCA 瀬尾さとみ)

コラム

オリーブの芽・目・Me

今回から、パレスチナを理解し身近に感じやすいように、名古屋 YWCA「オリーブの樹」の若いメンバーが執筆するコラムを掲載します。

「分離壁」

イスラエル側への「テロリスト」の侵入を阻止するため、こんな理由で、イスラエル軍は「分離壁」を建設した。いや、イスラエル軍に言わせれば、あくまでも「安全フェンス(security fence)」だ。安全。8m、650kmもの壁は確かにとてつもなく大きいものだ。しかし「テロリスト」は壁を越えて自爆「テロ」に及ぶ。「テロリスト」の侵入に対する万全な対策を望んだのだとすれば、それは果たされていない。

私にはこう思えてしまう。イスラエルの安全さえ確保出来ればいいのだろうか。パレスチナの人々が、住むところを変えなければならなかったり農業という職を失ったりすることをどう思っているんだろう。自分の家族がそんな目に合っていたら、と考えると壁を作るなんてできないと、想像できないだろうか。

(名古屋 YWCA「オリーブの樹」メンバー・
会員 坂本渚)

オリーブの木キャンペーン

1口3000円でオリーブの木1本を贈ることができます。

* 寄付者には証明書が発行され、植樹された場所にはプレートに寄付者の名前が刻まれます。

< 振込先 >

(郵便振替)日本キリスト教女子青年会

口座番号:00170-7-23723

* 通信欄に「オリーブの木」とご記入ください。

* パレスチナ YWCA による証明書発行のため、振替用紙にお名前のふりがなまたはローマ字表記を必ずご記入ください。